

「夏休み児童生徒の作品」

～学習成果発表～

校長 森 勝義

夏休み中に一時帰国した児童生徒や、現地校のサマーキャンプに参加した児童生徒、思い思いの夏を過ごしたようです。日本はお盆を過ぎ、学校は夏休み後半突入です。本校は既に授業は軌道に乗っています。子どもたちの屈託のない笑顔、挨拶を受けると心が和みます。安心、安全に過ごせる、いじめのない学校を教職員一丸となって目指していきます。

精選「言語文化」三省堂

待ち伏せ：ティム・オブライエン（村上春樹訳） アメリカの小説家ベトナム戦争に従軍。

待ち伏せを読んで。

高1 栗原 明衣

『待ち伏せ』を読む前は筆者の戦争の経験と言うことしか知らなかったの、ふんわりとしたイメージしかありませんでした。実際に小説を読んでみて、とても辛い話だと感じました。

筆者は手榴弾を投げて殺した敵兵士への罪悪感から逃れたい気持ちと、その過去に向き合えないといけないと言う気持ちが戦いあっている状態なのだと思います。この小説の中でそれが分かりやすく描かれているのは冒頭の娘との会話のシーンです。

筆者は娘に人を殺したことがあるのかと問われて、心の中では殺した過去を顧みるのが正解だとわかっていても、娘には殺していないと答えてしまいます。娘がもう一度同じ質問をしてくれたら、今度こそ自分の思う正当な返事をしたいのだと考えたはずです。この小説は筆者の人間的な部分を描いています。筆者の自分の行動を正当化したいと言う一面と、反面許されるべきではないことをしたと言う自覚を表しています。敵兵士に手榴弾を投げた後、仲間からは仕方がないと慰められましたが、自分の中では決して肯定できる行動ではなかったとわかっていたのだと思います。だから筆者は両方の気持ちが混在していて、曖昧な答えしかわからないのだと思います。唯一この罪悪感から逃れることができるのは小説を書き続けることであり、それが筆者の言う戦争の話を書き続ける理由なのだと考えました。

待ち伏せを読んで。

高1 金井 勇人

「待ち伏せ」という物語を読んで「若者」の行動におどろいた。物語の中で、「若者」が手榴弾を避ける場面で「彼はそこで躊躇した。」と書いてある。この場面でなぜ「若者」は手榴弾を避けることをやめたのか、そしてその一瞬の彼の心情はどのようなものだったのか、という疑問が浮かんだ。自分が「若者」の立場だったとしたら、躊躇せずにその場からすぐに逃げただろう。

「待ち伏せ」の物語の舞台はアメリカと北ベトナムの間で1955年から1975年までの20年間行われた戦争だ。この「若者」はもしかしたら戦争などはしたくなかったかもしれない。そして平和を求めていたのかもしれない。「若者」はこの戦争でとても苦しく、つらい経験をしたことによって生きるということを終わりにしたいと思ったのではないか。さらに、筆者が、「この男は今死のうとしてるんだと。私は彼に警告を与えなかった。」と「若者」について語っている。筆者のこの思いから「若者」が死を選んだことを理解し、それは彼の決断だったと筆者自身が自分に言い聞かせていたのではないか。筆者も彼を殺すために手榴弾を投げたわけではなかっただろう。

今でもそのことを後悔しているに違いない。

この物語は戦争の恐怖を表してる。この「若者」は、戦争のせいで自殺という道を選んだと思う。このような悲惨な死を止めるためにも、世界は平和であるべきだ。そして平和のために戦争を一刻も早く止めなければならない。戦争を止めるために私たちができることは、戦争の原因と世界の状況を理解し、考えることが大切だ。さらに、戦地で苦しんでいる人々の気持ちや状況を理解しなければならない。そして、戦争を終わらせたくさんの命を救いたい。

待ち伏せを読んで。

高1 竹内 啓太

僕は待ち伏せを読んで、娘のキャスリーンが九歳の時にお父さんは戦争で人を殺したことがあるかと尋ねてきて父親は困ってしまっていて殺していないと否定したが本当はあったので、戦争を経験している人はみんなこうして尋ねられてつらい思いをしているんだなと思いました。なぜなら、戦争をしている状況というのは人が死ぬかの戦場にいるわけなので、的を殺さなければならないという意味を常にもちながら、戦っていると思ったからです。

父親は道で待ち伏せをして敵を殺そうと思っていなかったのにも関わらず、何事もなく道を歩いてきて通り過ぎてしまった若者を無意識に殺してしまっすぎて後悔する思いが強かったと思うし、その行動でいまだに苦しみを抱えることになってつらい思いをしながら自分と戦っていると感じました。

自分の意思ではないことをやらせることが戦争であり、生き残っても苦しく悲しい記憶だけが残るのが戦争の恐ろしさだと思います。

最後に改めて戦争はあってはいけないし、二度と犯してはいけないこと、そして、人を幸せにすることはない戦争の恐ろしさや怖さを知ることができたと思いました。

待ち伏せを読んで。

高1 小林 輝月

今回は国語の課題で「待ち伏せ」を読みました。このお話は戦争時代のお話で、作者の実際に体験したことが書かれています。僕はこのお話を読んで作者の心はとても強いと思いました。僕がこう思った理由は二つあります。

まず1つ目は、自分の娘に対して作者が話したこと思ったことです。あるとき作者が自分の娘に「お父さんは人を殺したことがあるの?」と聞かれました。作者は「まさか、殺してなんかいないよ」と答えました。僕はこの答えが正解だったと思います。理由は、まだ幼い娘に戦争の話、ましてや自分の父親が人を殺していることを知るのは不適切だと思ったからです。しかし、その後、「またいつか娘が同じ質問をしてくれたらいいなと思う」と書かれています。僕はこの言葉にとっても驚きました。1度は嘘をついてでも教えなかったのにまた聞いてほしいと言っているのです。僕だったら教えることはありません。理由は、教えてしまった後の娘の反応が怖いからです。二つ目はこのお話のタイトルの通り、待ち伏せをして通りかかった敵兵を殺した後のことです。殺したことを整理できてはいないが、こうして教科書に載るようなお話を書くことがすごいと思いました。僕が同じ立場だったら、一生立ち直れず、本を書くどころか人としての生活をできなくなるかもしれないからです。しかも作者はこのようなお話を何個も作っています。

この二つの理由から、僕は作者の心は強いなと思いました。他にもこの作者の本を読んでみて、作者のことを知り、今後このようなことがないように努めていきたいです。

待ち伏せを読んで。

高1 岩谷 醍樹

僕はティム・オブライエンの待ち伏せを読んで二つのことを感じました。一つ目は、戦場での主人公の心情の複雑さです。ベトナム戦争で、道沿いの茂みで敵を待ち伏せしているときに若い兵士が銃を持って道を歩いているのを発見した主人公は、その兵士に向かって手榴弾を投げつけてしまいます。その時に「彼は何かしら朝霧の一部であるかのように見えた。あるいは私自身のイマジネーションの一部であるみたいに。」と「しかし私の胃の感触にははっきりとしたリアリティーがあった。」と文中にあるように、主人公は二つの感情や感覚を感じました。この文から

僕は、彼は頭では危機感や恐怖を感じていなく、主人公の胃が緊張によって胃痛を起こし、恐怖を感じさせているのではないかと思いました。

二つ目は、人間の本質が分かりやすく書いてあることです。手榴弾を投げる場面で、「さあ投げるんだと自分に言いかけさせる前に、私はもうすでに手榴弾を投げてしまっていた。」とあるように、頭が空っぽになってしまった主人公は条件反射的に手榴弾を投げてしまいました。「何もしなければ若者はおそらく何事もなくそのまま通り過ぎてしまったことだろう。」と主人公が回想したのは、頭より先に身体が反応したという主人公の意志とは異なることを身体がしたということが、主人公は納得できないのだと思います。僕はこの生きるか死ぬかの瀬戸際での主人公の行動が彼の感情と対立し、自分で自分に違和感を覚え、自分で自分がわからなくなっているのだと感じました。待ち伏せを読んで、これらの主人公の心情の変化や、人間の本質のことを感じました。

待ち伏せを読んで。

高1 鎮田 優杜

「もし、立場が逆だったらこの死んだ男はどう行動していただろう」という言葉は、戦争中主人公が一人の若者を殺してしまった時に主人公の相方である、カイオワがうなされ愕然としている主人公に対して説得を試みた時に放った言葉です。

僕はこの言葉を聞いて中学校で部活をしていた時の事を思い出しました。それは、中学2年生のソフトテニス部で他校の学校に行きダブルス練習試合をするという流れでした。そして、僕たちのチームは、順調に勝ち続けて行きましたがベスト8になれるかも知れない場面で一軍というその学校で一番強い相手と当たってしまいました。しかし僕達は必死に食らいつきましたが、あと1点取られたら負けてしまう場面で僕は簡単に打つ事ができる所でミスをしてしまい負けてしまいました。そして僕は、自分のせいで負けてしまったことに呆然としてしまいました。

そんな時にチームの相方が、いっぱい説得をしてくれたので、僕は立ち直る事が出来ました。なのでこの待ち伏せという内容を読み主人公が相方の説得を聞いた後に「そんなのはどうでもいいことだった」という考えに怒りを僕は持ちました。

なぜかというとせつかく相方が説得を試みたにも関わらず理解しようともせずに話を聞いていたからです。もし相方の説得をしっかり聞いて気持ちを持ち直していたら娘に戦争の事を聞かれた時にしっかり答えていたら後悔しなかったと思ったからです。

「空き缶」作者 林 京子 小説家 15歳の時に長崎で被爆。作品に「上海」「三界の家」「長い時間をかけた人間の経験」などがある。

空き缶

高2 大狭間 暖

これは私が産まれる前に起こった戦争の話です。林京子さんという方が子供の頃に経験した事について描かれています。

私の心が一番動かされたことは、原爆投下後から卒業するまでの二年間、校舎には窓ガラスが一枚もなかった。ということです。その理由は信じられないほど辛いなと思ったからです。被爆し仲間を失い、さらには自分たちの学校まで壊されてしまった。私は学校に通えることが日常生活の普通で、とても楽しい事だと思います。しかし、その生活ができないとなると本当に辛いです。そう思うと今現在私が通っているアメリカの学校は本当に綺麗だな、私は恵まれているなと思います。

私は戦争は絶対にやるべきではないと心の底から思います。戦争を行うとなるとどうしても多くの人を巻き込むこととなります。自分の意思では戦いたくない、争いたくないと思っていても戦う必要があります。それにより多くの被害を生むことに違いないでしょう。戦争がないということがどれだけ幸せであるか平和であるか、これを読んで改めて感じました。これからもたくさんの幸せを感じるがあると思います。一つ一つの幸せというものをしっかりと噛み締めて生きていきたいと強く思います。

私は林京子さんが書いた「空缶」を読みました。この本は長崎県に住んでいた、主人公を含めた5人の女性の日常が静かに描いており、“原爆の悲惨さ”がよく分かる本でした。

登場人物の内の4人の被爆者は、原爆症が再発することに怯えていたり、被爆によって発症した病気に悩んでいました。これに対して私は被爆者は生き残ったとしても、それぞれ後遺症に悩まされるという被爆者のリアルを思い知らされました。

私はこの物語の中で“きぬ子の空き缶”が印象的でした。きぬ子が学校に持ってきていた空き缶の中身はとても衝撃的なものでした。学校に両親の骨を持ってくるという驚くべき行動は、計り知れないほどの孤独感と精神的な苦しみを抱えていたからかと想像出来ます。

先生がその正体を尋ねるまで、クラスメイトが空き缶の中身を知らなかったのは、原爆を落とされた後の世界は人の秘密にはあまり触れてはいけないという暗黙の了解のようなものがあつたのかも知れないと思いました。

このように「空缶」を読んで、私は家族や友達がいて、原爆による病気もない幸せを改めて感じる事が出来ました。今ある生活をもっと大切にしていきたいと思います。そして、私は非被爆者ではありますが、原爆投下についての理解を深め、次の世代へと語り継いでいく必要があると思いました。

この物語は、主人公の私を含めた女性5人が来年廃校になる名門、長崎高等女学校の校舎を見るために集まる話です。

私がこの物語を読んで心に残った場面は、校舎を見るために集まった女性5人のうち4人が原爆を体験していた。被爆していない一人は夫に死なれていたが、とても前向きに生きていたところです。私がもし夫に死なれていたら立ち直れなく、前向きには生きていけなかったと思うので印象に残りました。私は、何か悲しいことが起こるとそれに対して引きずってしまいますが、被爆していない一人がとても前向きに誰よりも元気に過ごしていることがこの物語の中でとても尊敬する場面です。

このように、私はこの物語を読んで何か悲しいことが起きたとしても起こったことは巻き戻せない。だからこそ、気持ちを入れ替えて今後どのようにするのかを考えるということが私の考えが変わった部分です。これからは、学んだことを生かして悲しいことがあつたり、失敗をしても自分の感情を受け入れたり、人と話すことを私自身の生活に取り入れたいと思います。

てんかたいへい

天下泰平

世の中がよく治まり、平和なこと。「泰平」は世が平穩に治まる意。出典・「礼記（らいき）」

努力だ、勉強だ、それが天才だ。

野口英世（のぐちひでよ）

1876年～1928年。細菌学者

努力と忍耐の結晶で世界に名を残した学者の言葉には、大変な重みがある。



ヒゲ森の言葉の森・探検

